



無慈悲駅 ほか短編 2 話

仲俣 伊俯

聞こえる人

世界で天災が起きて、人類全員の耳が聞こえなくなった。ただ一人、比鳥武雄を除いて。

「聞こえるのはオレだけか！ これはとんでもないことになったぞ！」

事態の恐ろしさに震えた。

だが、少し考えて、それから笑みを浮かべた。

「オレは今、世界でただ一人の、聞こえる人なのだ！ きっと英雄になれるはずだ！」

期待に胸を膨らませた。ワクワクが止まらなかった。

ところが比鳥が期待した通りにはならなかった。

世界の共通語は手話になった。

電話は姿を消した。電子メールやファクシミリが大活躍するようになった。

世の中は聞こえない人にとって便利になっていった。

もはや聞こえないことはハンディでもなんでもなくなった。

人々が皆、手話で語るため、比鳥も手話を覚えなくてはならなかった。

「くそっ、オレは聞こえるのにどうして手話を勉強しなきゃいけないんだ」

とても悔しかった。

比鳥は音楽鑑賞が趣味だった。

しかしCDショップは軒並み閉店してしまい、新しいCDを買うことができなくなった。

すでに手元にあるCDを繰り返し聞いていたが、やがて飽きてしまった。つまらないと思った。

自動車や洗濯機などの電気製品の騒音が非道くなった。音の静かな物を作ろうと考える人が誰もいなくなったからだ。

ドガッ！ ガガガ！ ピー！ プシュー！

音がうるさいため、昼は気が散って仕事に差し障り、夜はろくに眠れなかった。

しかもこの苦しみを味わっているのは比鳥だけ。

孤独感が苦しみをさらに増した。

丸めたティッシュを耳に詰めてみたが、まだ音はおさまらない。

耳栓などというものはすでに売っていない。

比鳥は家電メーカーに苦情の電子メールを送ったが、まるで相手にされなかった。

ついに耐え切れなくなり、医者に頼んで鼓膜を破ってもらった。

大根

野菜村には、たくさんの野菜たちが仲良く暮らしている。
大根も、そんな野菜たちのうちのひとりであった。

隣の家の人参がカレーライスの具になったと聞いて、大根は、自分もカレーライスの具になりたいと思うようになった。

野菜長老に話を聞きに行った。

「僕も人参さんみたいに、カレーライスの具になりたいんです」

すると長老は表情を曇らせた。

「うむ…… そうか…… しかし、お前は大根だ。大根は煮込んでいると汁気が出てしまうんだ。だからカレーライスの具にはなれないんだよ」

大根はショックを受けた。

それから大根は、来る日も来る日も、トレーニングに明け暮れた。

努力すればきっと実ると信じていたからである。

きっと汁気の出ない肉体になって、カレーライスの具になってみせる。大根は強く決意した。
腕立て、背筋、スクワット、カウチポテトなど、厳しい訓練を続けた。

ついに大根は、引き締まった肉体を手に入れた。

しかし煮込むと汁気が出た。

絶望して崖の上に立った。

下は断崖絶壁だ。一瞬でラクになれるだろう。

すべてを終わらせよう。そう思った。

下は海か……。あんな塩だらけの水に漬かったら、僕、塩漬けになっちゃうな。

大根は自嘲的に笑った。

漬物、か。

漬物になった自分を想像した。

そして、憧れだったカレーライスのこと。

カレーライスの横に漬物だと？

悪くない！

大根は踵を返し、駆け出した。

目指すは野菜長老のところだ。

「何い！ カレーライスに福神漬けを添えるだと！？」

長老は目を丸くして声を張り上げた。

横にいた若い野菜たちが、次々と歓声をあげた。

「俺はいいと思うぜ！ カレーに漬物！」

「いいかも知れんぜ！ やってみそ！」

「意外と合うかもね」

長老は彼らの声を聞きながらつぶやいた。

「フッ、私も老いたものだな」

次の日、大根は朝一番で飛び出し、そして福神漬けになった。

福神漬けは、カレーライスのもとへ赴き、熱心に自分を売り込んだ。

柔らかいカレーライスの感触と、カリッとした福神漬けの感触の相性の良さ。

黄色いカレーライスと、赤い福神漬けの色のコントラスト。

それらを説明し、熱心に売り込んだおかげで、ようやくカレーライスの心を動かすことができた

。

「福神漬け。オレたちのチームに入れ」

「はい！ よろしくお願いします！」

こうしてカレーライスの具になるという長年の夢を、ようやくかなえたのだった。

めでたしめでたし

無慈悲駅

羽佐間カズキは、ベランダにアリの行列を見つけた。

「ここは公園じゃねえぞ！ ベランダだ！ 間違えるな！」

羽佐間はハウキでア리를叩きつぶし、外に掃き出した。

夜になり、ビールを飲みながらテレビを眺めていたが、おつまみがないのに気づいて買いに出かけた。

外に出ると、黒いワンピースに身を包んだ若い女が、手招きしていた。

羽佐間は、女の後をつけた。

一瞬、まばゆい光が辺りを包み、目を閉じた。

目を開けるとそこは全く知らない場所だった。

「な、なんだ、ここは」

羽佐間は驚いた。女の姿はもうなかった。

「こうしちゃいられない。さっさと帰らないと」

看板や地図を頼りに歩き、ようやく駅に辿り着いた。

『無慈悲駅』

聞いたことない名だな、と羽佐間は思った。

切符を買おうとして販売機の前に来ると、前の客がお札と間違えてレシートを入れてしまったのを見つけた。

「し、しまった！ 間違えてしまった！」

とうろたえた。

すると黒いスーツに身を包み、サングラスをかけた男が2人やってきて、客を左右から挟みこんだ。

男の一人が口を開いた。

「この町では、間違いは許されない」

客は黒いワゴンに乗せられて、どこかへ連れていかれた。

「今のは何だ！ 間違えるとああなるのか！」

羽佐間は背筋がぞーっとした。

絶対に間違えてはならない！

羽佐間は『溝の口』の3文字を探し、その通りの値段の切符を買った。10円たりとも間違えてはならない。

改札は手動だった。

駅員がハサミを持って手で切符を切っていた。

「今どき手動とは珍しいな」

と羽佐間は思った。

羽佐間は駅員に切符を渡した。戻ってきた切符を見ておやっと思った。

長方形の切符の、辺の短いほうに切り込みが入っていたからだ。

羽佐間は駅員にくってかかった。

「これ、普通は辺の長いほうに切り込み入れるんじゃないの？」

「あ…… いや、その……」

駅員はしどろもどろだ。

黒いスーツの男たちがやってきた。彼らは駅員を左右から挟みこんだ。

駅員は青ざめて震えたが、はっとひらめいて叫んだ。

「違うんです！ 間違えたんじゃないありません！ お客様からの要望でこの位置に切り込みを！」

「俺そんなこと頼んでない」

駅員は黒いワゴンに乗せられて、どこかへ連れていかれた。

黒いスーツの男がもう一人現れて、羽佐間にやさしく声をかけた。

「災難だったな」

「ええ、まあ」

羽佐間のはにかみながらそう答えた。答えながらも内心

「黒スーツには関わりたくない。早く溝の口へ帰りたい」

と思っていた。それに、とても緊張していた。なにしろ少しでも間違えてはならないのだから。

男は羽佐間に言った。

「代替りの切符を我々のほうで用意する。お前の目的地を言え」

羽佐間は答えた。

「みじよのくち」

羽佐間は黒いワゴンに乗せられて、どこかへ連れていかれた。